

江東の掘割・川 ⑤

深川南部の海岸線を形成して—大島川・洲崎川—

江東区深川江戸資料館

深川南部を東西に流れる大島川（現在は名称が変わり大横川の一部）、洲崎川（現在は埋め立てられ緑道公園）は、ともにかつての海岸線であったところに造成された川です。付近の木場や洲崎の情景もまた、海岸に形成された名所のひとつでした。今号では、これら深川の南端の海岸線を生かしてそこに形成された川と、その周辺の景観をみていきます。

大島川

大島川は、木場5-3から永代1-7に至る1,700mの河川です。河口はもと海岸線で、付近は獺（漁）師町です。越中島の成長により河川になりました。上流は、元禄12年（1699）に周辺の埋め立てとともに開削されました。

元禄12年は、木場が元木場から移転した年です。寛永（1624~44）のころから佐賀・福住周辺で営まれた「元木場」は、この年、幕府の政策により、その東側に移転することになりました。そこは、深川築地町とよばれていた木場・平野・三好のあたりでしたが、いまだに造成の完成をみていない低湿地でした。このような土地では手に負えないと、材木商たちはここを幕府に返上し、猿江に移転します。

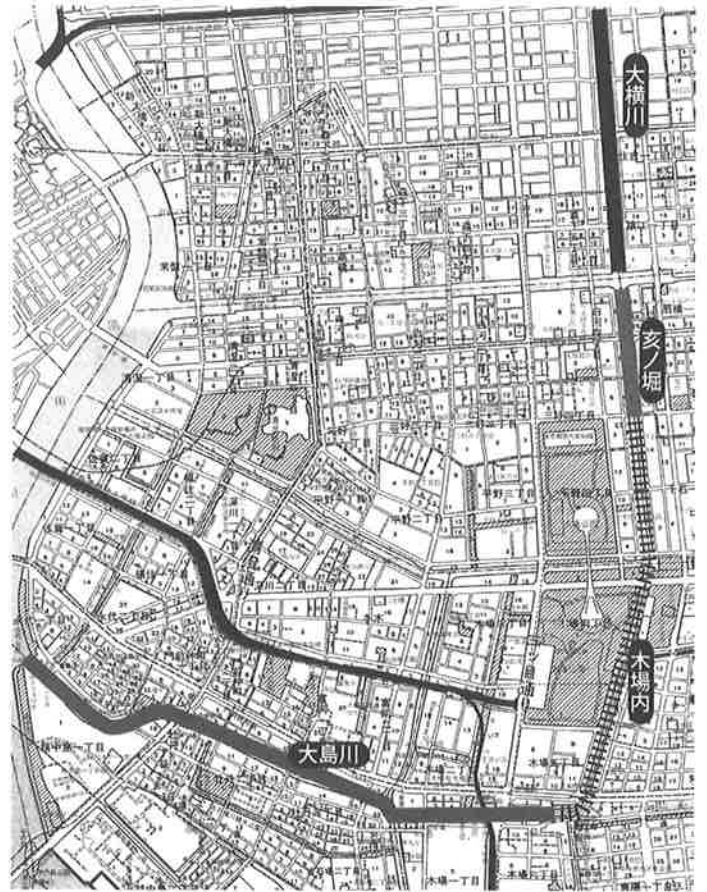
2年後の元禄14年（1701）になると、猿江も幕府用地として収公され、2年前に比べて干拓も進んだ深川築地町が再び材木商たちに払い下げられます。約9万坪（297,000㎡）の広さであったといわれます。これが昭和50年代まで繁栄した現在の木場公園周辺の「木場」です。

大島川という名は、河口近くの獺師町、大島町から付けられたものですが、上流は、元禄12年、木場周辺の干拓の進行と同時に形造られたものであり、木場と密接な関係をもつ川であったことがわかります。木場については、後に改めて述べることにします。

洲崎川

いっぽう洲崎川は、大島川に比べて歴史は新しく、その開削は明治になってからです。

明治20年（1887）、現在の東陽1丁目が埋め立てら

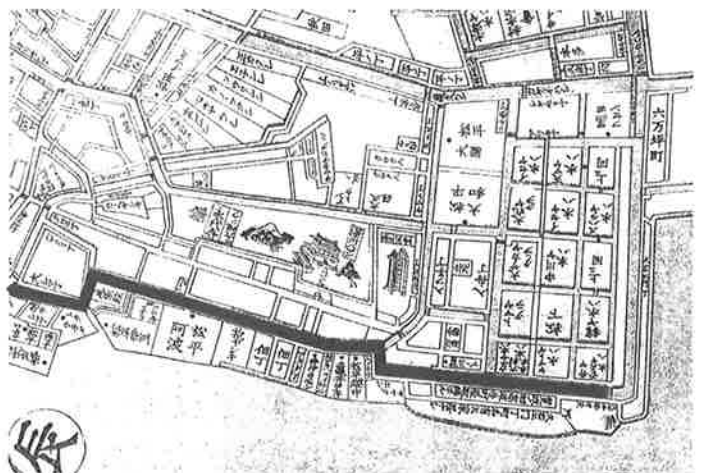


上：「江東区全図」平成10年

本来の大島川は、—線で示したところを指すが、昭和40年の河川法施行以降、本所から南下して流れてきた大横川と一水系とみなし、大横川とよばれるようになった。

下：「御江戸大絵図」天保14年

江戸時代の大島川を、上の図と同じく—線で示した。この図の下端の海岸線がのちの洲崎川となる。



れたとき、海岸線を残して川にしたものです。この運河開削のやり方は、江戸時代から同じです。深川村発祥の地(森下)に近い小名木川に始まり、開削当時の海岸線を生かして川を掘り、掘った川に排水路の役割を担わせながら掘り上げた残土でその先の海を埋め立てていくという方法で運河の開削と土地の造成を同時に進め、陸地をひろげてきたのが深川という土地の成り立ちです。

明治の海岸線の面影をを残す洲崎川は、昭和57年(1982)に埋め立てられて緑道公園となりました。この年は、木場の新木場移転が完了した年であり、洲崎川もまた、木場の材木の水上運搬のための機能を果たし、木場とともにそのすがたを消した川といえるでしょう。

木場とその周辺

このように、大島川も洲崎川も、元禄14年(1701)から昭和57年の新木場移転まで、現在の木場公園周辺で繁栄した「木場」と隅田川をむすぶ川として重要な役割を果たしました。

木場は、徳川家康の江戸入府とともに始められた都市計画のなかで、日本橋に材木商たちが集住して町を形成したことに始まります。最初の移転は、寛永18年(1641)の火事を契機に深川に移ってきた時でした。このときの木場は「元木場」とよばれます。その後、猿江に移転したのち元禄14年、いわゆる木場に移転します。ここが、移転の繰り返しのなかで最も長い280年の歴史をもつ「木場」です。木場は独特の景観をもっていました。江戸の材木取引を一手に引き受け繁栄を極めた反面、海岸にちかい水辺の鄙びた情感をも醸し出し、その情景は江戸後期の風景画家として名高い歌川広重(1797~1858)をはじめ多くの画家によって描かれています。

木場は高度経済成長の下で手狭となって移転の話が持ち上がり、昭和49年から昭和57年(1982)にかけて地面約115万m²、水面約59万m²の広大な新木場へと移転しました。貯木場は木場公園となり、材木運搬のため活躍してきた多くの川は「不要河川」とされ、埋められてしまいました。しかし、このときまで、深川のあちこちに江戸の面影をのこす木場の情緒、水辺の景観が残っていました。

大島川・洲崎川沿いの名所

江戸時代の海岸の情景—洲崎— 付近は、江戸時代からの海岸の名所です。洲崎弁天付近は、日の出や潮干狩りに多くの人びとがおとずれ、錦絵などにその



旧大島川(大横川)木場5丁目付近 2008.1撮影

様子が描かれています。

大島川河口を形成した越中島 越中島は江戸時代のはじめ、隅田川河口の寄り洲であったところを、榊原越中守が賜^{たまわ}ってこの名がつけました。明治8年(1875)、越中島町全域が陸軍用地となり、明治31年(1898)まで練兵場として使用されました。

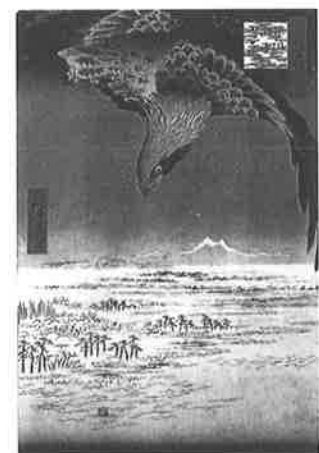
海岸ははるかに

明治の海岸線をのこす洲崎川。埋め立てによる土地の造成は、その後も絶え間なく続きます。関東大震災の起こった大正12年(1923)から戦前にかけて枝川、越中島3丁目、豊洲、東雲が、戦後から高度経済成長の時期には夢の島、辰巳、潮見、豊洲6丁目、新木場があい次いで埋め立て地造成の完成をみましました。

江東区南部は、いまでははるか沖まで新しい町が続き、ビルが建ち並びます。



洲崎川緑道公園 2008.1撮影



歌川広重画「深川洲崎十萬坪」荒涼とした埋立地の情景が描かれた安政期の名作。